

肥後拵・慶長拵の「山道文」

やまみち

伊藤 三平

前回（「刀和」令和4年7月号）、「この透かし文様は福島正則の軍旗「山道文」か？」の小論を発表した。金山鐔にある縦にクネクネの文様（山道文・立湧文）が福島正則の軍旗の文様と同様であり、これに由来するのではと論じている。

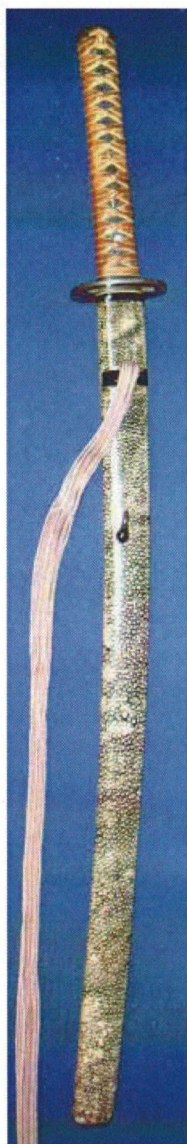
1. 肥後拵のかしら頭の山道文

一般に山道文と言うと、肥後拵の頭のかしら（かしら）に使われているものを思い浮かべる。肥後拵の手本となるのは細川三斎（忠興）の愛刀の拵だが、
「信長拵」（肥後藩中では「御家拵」とも称す）、
「歌仙拵」（希首座拵）などが伝わる。残念ながら現存しているのは「歌仙拵」だけだが、これらの拵の写し物は旧藩時代から近年に至るまで作られている。その写し物の一つを所蔵しており、写真に掲載する。

これらの拵の頭は、信長拵が「四分一地に波の毛彫に山道の深彫」、歌仙拵が「山銅地に平の字を變形して山道文様にして深彫」、季首座拵が「赤銅地の波の毛彫に山道の深い彫」である。



（信長拵の写し、四分一地に波の毛彫に山道の深彫）



（右写真…信長拵＝御家拵の写し。

ただし本歌にある小柄櫃、竿櫃は無い）



（歌仙拵の縁：『肥後金工録』（長屋重名著）より）

頭

2. 安土桃山時代（慶長拵）時代に流行した山道文

拵は武士が携行する武器（刀）を収めるものであると同時に、武士の容儀を整える装身具である。容儀はファッションでもあり、時代の流行に影響される。江戸時代になると、幕府は贅沢の禁止と、治安維持・華美な出で立ちの歌舞伎者、旗本奴などのならず者の取締、長大な刀の規制）を強めていく。その為に、自由奔放な安土桃山時代や江戸時代前期の刀装は残っているものは稀である。寺社に奉納されたものか、藩祖の所持品として大切に伝来したものくらいである。それらを集めて、昭和60年に東京国立博物館で「打刀拵―刀剣外装の美―」の展覧会が開催され、その図録の『打刀拵』（東京国立博物館）が刊行されている。この本に古い時代（元禄頃も含む）の打刀拵（太刀拵は除く）が73腰所載されている。これらの拵の頭部分だけを調べると次の通りである。（この本では「山道」を「山路」と記しているが、この論では「山道」に統一する）

- ①角（黒漆掛けも含む） 39腰
- ②金属地（金、銀、赤銅、四分一、山銅等）の簡単な加工 11腰
- ③金地、赤銅地に家紋や牡丹等、 2腰
- ④兜金（太刀金具の応用で、半太刀拵も含む） 9腰
- ⑤山道が彫られているもの（地金は種々） 4腰
- ⑥木に漆 2腰
- ⑦頭が欠損して無いもの 6腰

「角」が圧倒的である。拵愛好家の垂涎の的である「天正拵」の代表作である「助真拵」や「明智拵」も「角」の頭である。

山道文の頭が使われているのが4腰あり、詳しく見ると次の通りである。

- 金蛭巻朱漆大小拵（金無垢山道形鍔地）：秀吉所用の大小拵（国宝）
- 朱漆打刀拵（銀山道形）：結城秀康の二匹牛の鐔で朱鞘の拵（重文）
- 金霞蛟青漆打刀拵（金波文薄肉彫山道形）↓黒田孝高（如水）の豪華な拵（重文）

（注）この写しの拵で、圧切長谷部が納められているものも存在する。

●腰刻黒漆研出蛟打刀拵（山銅山道形）：細川三斎の歌仙拵である

なお、栗形に山道文が施されている拵もあり、本の写真でわかる範囲で挙げると次の通りである。

- 黒漆合口打刀拵：上杉謙信の山鳥毛一文字の拵
- 黒漆合口打刀拵：上杉謙信の姫鶴一文字の拵
- 金熨斗刻青漆大小拵：立花宗茂の大小拵（重文）
- 金梨地合口脇差拵：毛利隆元が厳島神社に奉納した拵

山道文を拵に用いているのは、いずれも高名な戦国武将（豊臣秀吉、結城秀康、黒田孝高、細川三斎、上杉謙信、立花宗茂、毛利隆元）であり、細川三斎だけの好みではないことが理解できる。

同書における毛利隆元が厳島神社に奉納した拵の解説文に「栗形がNO 19（姫鶴一文字の拵）の半太刀と同じく山道形金具となる。この形の頭や栗形金具をつけたものは桃山期の拵にはまま見受けられるもので、時代の流行であつたのだろうか」（傍線は筆者）と記されている。

黒田孝高の拵のハバキに「埋忠」の銘があることと、細川三斎が信長拵の小柄の取り合わせに思案して、千利休に相談したという逸話があることから、山道文の金具は京都、それも埋忠工房での製作が考えられる（「打刀拵」より）。

3. 「山道文」の頭が流行した契機―細川三斎と伊達政宗の交流―

『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）には「山道頭」が項目として掲載されている。

①横に蛇行した曲線。家紋や文様に用いられ、単に山道ともいう。②刀の柄頭の金具に、S字形の曲線を彫り込んだもの。肥後金具によく見るもの。細川三斎の愛刀・信長拵に、山道の頭をつけているが、これは奥州の伊達政宗から贈られたものという。（この出典は『仙台金工之研究』長岡恒喜著と注記）

細川三斎と伊達政宗の交流について、長岡恒喜氏の記述ではないが、細川護貞氏（熊本細川家十七代）が次のような興味深い内容を記されているを紹介したい。

「細川三斎と千利休との交流を記した後に」更に三斎は仙台の伊達政宗公とも交渉があった。―中略―刀装の金具に於いて、肥後と仙台に区別しがたい程にかよったものがあるのは二人の友情がしからしめたものと云ってよいのではなかろうか。特に縁頭に於て然りで、一例を挙げれば、三斎の佩刀として有名な信長拵の波に山道の頭は、伊達政宗考案のデザインであり、三斎によってその形が肥後に定着したものである。つまり利休の「わび・さび」と仙台物の小粋な華やかさ、いわゆる「伊達さ」とが三斎を通じて、渾然と一体化したものの、それが肥後物の良さである。」(永青文庫季刊誌N. 17(昭和61年発行)より、原典は「肥後の金工」展図録(熊本県立美術館)とある)

細川三斎と伊達政宗の交流について、①共に筆まめな二人の間の手紙が多く残っていること、②忠興が名香の「白菊」を政宗に贈り、政宗はそれを「紫舟」と名付けて家宝にしたこと、③政宗が細川家の九曜紋を請うて貰った(後に政宗は片倉小十郎に与える)ことなどが伝わっている。

なお、私は仙台清定の縁頭に山道文が彫られているものを見ており、肥後と仙台の金具の類似性の指摘は理解している。

4. ファッション・リーダーの伊達政宗

細川三斎は利休七哲の一人で、当代を代表する文化人として、その美意識が高く評価されていたことは言うまでもないが、伊達政宗のファッションセンスの高さを物語る逸話も多い。①小田原参陣に遅れた時に白装束を着て秀吉に詫びたこと、②秀吉が主催した吉野山の花見で、伊達政宗とその一行は、鈴懸の衣・檜笠・金剛杖を持った大峯山の山伏のコスプレで登場し、秀吉に褒められたこと、③文禄の役で京都から出陣する時、伊達政宗隊は、紫紺地に金の日の丸の幟を30本なびかせ、足輕隊は金とんがり笠をかぶり、黒色の具足、朱鞘に銀の金具の太刀で統一し、馬上の武者は金色の半月が描かれた黒の母衣で揃え、大将・伊達政宗は、黒の羅紗地に背中に大きな金色の家紋をあしらった陣羽織袴も黒羅紗に金糸模様、そして兜はもちろん三日月の前立ての華麗な装いと伝わる。金を多用しても派手になりすぎない上品な豪華さに、京の人々は絶賛したと伝えられていること(これ以来、派手な装いを粋に着こなす人のことを

「伊達者」と呼ぶようになるという説も生まれる)、④寛永三年に將軍上洛時に伊達家士の装束が目惹くものだったこと(語源辞典の中には、これを「伊達」の語源との説の一つと挙げているものもある)

仙台市博物館に伊達政宗の陣羽織と伝わる紫地に金糸で家紋「竹に雀」を縫い、五色の丸い水玉を大小様々に散らしたものがあ。近年の調査で、製作時代は下がるという結論が出たそうだが、政宗着用したものを後世、忠実に模したものであろう。これを着た男である、伊達政宗は。



「(紫羅背板地五色 水玉模様陣羽織)：仙台市博物館蔵」

おわりに ―波に山道の不思議―

ファッションの流行と言うものは、一人のファッション・リーダーによって生み出されることがある。ミニスカートもツイギーというモデルからだ。そして識者は、後からもっともらしく流行の背景を論じる。

伊達政宗、細川三斎が流行らせた山道文の刀装金具流行の背景を論じる愚を、私も繰り返したい。

頭を山に見立てると、麓である柄巻のところから、頂にかけて深影で道のように伏つており、山道と称するのも理解できる。それぞれの人生に思いを巡らせたのかもしれない。しかし、そうであれば、何故、波を彫った上に山道なのかと不思議に思う。私は、大航海時代の息吹を極東で感じた武將が、大海原を航海した船の航跡として意識したのかなと思う。伊達政宗は支倉常長をローマに送っている男だ。